※藍畑の様子

タミルナドゥ州ティンディワナムの藍畑では山羊が放し飼いされています。山羊たちは藍の葉は食べず藍畑の中で育つ草を食べ、その山羊の糞が肥料になるという、自然の摂理にかなった方法で栽培されています。この地では収穫されたインドアイを工場主が全て買い取り、伝統的なスタイルで純度の高いインディゴ（藍塊）を製造しています。そして近隣のオーロヴィでは、このインディゴの発酵に常に気を配り、試行錯を繰り返しながら染めを追及するこだわりの強い職人たちが存在します。現在、染色される衣服用の藍はおおよそ 30～40 年前の 1983 年頃から発酵させたものを使用しています。藍の葉は青い色素(インディゴ)の「藍色の元になる成分」を持っていますが、そのままでは染料になりません。その藍の葉に傷をつけ、空気や光や水に触れて発酵させることで青い染料となります。ここまで藍の発酵を維持できるのは、インドアイの種子を藍瓶の中に入れ、バクテリアの力で活性化させるからなのです。

また UPASANA がデザインしたものには、過去にフランスの統治下であったポンディシェリの風土が育てた、フランス系デザイナーたちのセンスが存分に生かされ、天然素材が持つ力強さをそのままにエレガントに仕上がっています。

※藍染の様子